

東かがわ市内遺跡発掘調査報告書

平成16年度国庫補助事業報告書

引田城址

2005.3

東かがわ市教育委員会

序

東かがわ市は平成15年4月に、引田町・白鳥町・大内町が合併して誕生しました。新世紀の始まりとともにその名を歴史に刻んだ東かがわ市であります、それぞれの町には先人たちの築いた文化遺産が数多く残されています。大地に刻まれ今日まで伝えられてきたその姿は、時代時代を生きた人々の営みであり、そこに我々が今在る証を見いだすことができるのです。東かがわ市教育委員会では、こうした文化遺産を郷土の歴史と文化を理解するうえで重要と考え、適切に保存し広く活用していくことに取り組んでいます。

今回報告する市指定史跡引田城址は、瀬戸内海を一望することのできる山上に、そびえるかのような高石垣をもつことで知られる城郭であります。また、麓には海上・陸上交通の拠点として発展した引田を身近に感じさせる、城下町としてのたたずまいを残した町並みが広がります。往時をしのばせる高石垣の威容やそこから見渡す景観はすばらしく、古くより人々に親しまれてきました。本報告書が、埋蔵文化財の保護の一助になるとともに、地域の歴史研究においても活用していただければ幸いと存じます。

最後になりましたが調査に際し、地元の皆様をはじめ関係各位より、多大なるご理解・ご協力を賜りましたことに対して、衷心より感謝の意を表します。

平成17年3月

東かがわ市教育委員会 教育長
桑島 正道

例　　言

1. 本報告書は、東かがわ市教育委員会が平成16年度国庫補助事業として実施した、東かがわ市内遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 今回の遺跡発掘調査は、東かがわ市引田城山国有林に所在する引田城址を対象とした。
3. 調査に際しては所有者である国の同意を得、保安林・瀬戸内海国立公園に関しては関連機関よりそれぞれ作業許可を得たものである。
4. 調査の実施にあたっては東かがわ市教育委員会が調査主体となり事務を、調査実務は東かがわ市教育委員会の依頼を受け大川広域行政組合埋蔵文化財係が実施した。
5. 本報告書の作成は引きつづき大川広域行政組合埋蔵文化財係が実施した。作業総括および執筆編集は阿河銳二が担当した。遺構・遺物の製図は多田歩、遺物整理は間嶋京子によるところが大である。
6. 本報告書で用いる方位の北は、磁北である。縮尺は掲載図面内にスケールで示した。
7. 掲図の一部に国土地理院地形図「三本松」・「引田」（1/25,000）を使用した。
8. 本報告書の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色彩監修「新版標準土色帖1998年度版」を使用して表す。
9. 調査および報告書作成に際しては、地元及び以下の機関・方々のご協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同・敬称略）

四国森林管理局香川森林管理事務所	香川県東部林業事務所	香川県自然保護室
香川県教育委員会文化行政課	東かがわ市歴史民俗資料館	(社) 東かがわ市シルバー人
材センター	引田町並み保存会	片桐孝浩　山下平重　東信男　大嶋和則
近藤武司	松本和彦　松田英治	荻野憲司　板嶋菊男　池田正明　芳田 司
東　馨	白井道夫　新居正男	河野 博　水口恵美子　山西 仁

本文目次

序	
例言	
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 立地と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	5
第1節 引田城址について	5
第2節 第I調査区	7
第3節 第II調査区	16
第4節 出土遺物	22
第4章 まとめ	26

出土遺物観察表
報告書抄録

挿図目次

第1図	東かがわ市位置図	1
第2図	周辺遺跡位置図	3
第3図	調査区位置図	5
第4図	第I調査区地形測量図	7
第5図	トレンチ平・断面図①	9
第6図	B-3 トレンチ平・断面図	10
第7図	Bトレンチ調査状況図	11-12
第8図	礫石平・断面図	13
第9図	Dトレンチ石垣平・立・断面図	14
第10図	D-2 トレンチ東壁土層図	15
第11図	第II調査区地形測量図	17
第12図	1トレンチ平・立・断面図	18
第13図	2・3トレンチ平・立・断面図	19
第14図	4トレンチ平・立・断面図	20
第15図	5トレンチ土層図及び立面図	21
第16図	出土遺物実測図①	23
第17図	出土遺物実測図②	24
第18図	軒平瓦参考例	26

図版目次

図版1-1	第I調査区近景	図版5-1	第II調査区近景②
図版1-2	A-1 トレンチ遺物出土状況	図版5-2	第II調査区近景③
図版1-3	C-1 トレンチ礫石出土状況	図版5-3	1トレンチ検出状況
図版2-1	B-1 トレンチ検出状況	図版6-1	3トレンチ検出状況
図版2-2	B-2 トレンチ検出状況	図版6-2	4トレンチ検出状況①
図版2-3	B-3 トレンチ検出状況	図版6-3	4トレンチ検出状況②
図版3-1	壇状遺構近景	図版7-1	4トレンチ検出状況③
図版3-2	石垣検出状況①	図版7-2	4トレンチ検出状況④
図版3-3	石垣検出状況②	図版8-4	5トレンチ検出状況①
図版4-1	石垣検出状況③	図版8-2	5トレンチ検出状況②
図版4-2	壇状遺構石材(矢穴)	図版8-3	槽台東西石垣
図版4-3	第II調査区近景①		

第1章 調査に至る経緯

今回報告する市指定史跡引田城址は東かがわ市引田に所在する。香川県においては平成9年度から14年度にかけて、全県的な中世城館をはじめとする関連遺跡の調査が実施された。引田城址は平成12年度に引田町史跡に指定されていたが、この成果の中であらためて県内城館の歴史的動向や位置付けにおいて、最高ランクの評価に相当するものとされた。これまでのところ引田城址においては簡易な地形測量や縄張図などが作成されてはいるが、おおよその様相把握にとどまるものである。確実な造構・遺物の検討による郭の機能的な解明や、時期ごと(とくに前段階にあたる16世紀前半)の造構の様相や変遷などについては全く不明といわざるを得ない。

今回、東かがわ市教育委員会ではこれらのこととふまえ、市内所在文化財の内容についての基礎的な資料を得ることを目的とし、また今後の文化教育活動に資するために平成16年度の国庫及び県費補助金による、引田城址における確認調査を実施したものである。なお、調査の実施にあたっては、東かがわ市教育委員会が事業主体となり、現場実務については同教育委員会より依頼を受けて大川広域行政組合理藏文化財係が担当する形式で行うこととした。調査は城域内2ヶ所に調査区を設定し、枝などの伐採後地形測量・トレンチ掘削によってその状況の確認に努めたものである。現場実務は平成16年10月1日より着手し、平成17年1月21日に完了した。

調査体制は下記のとおりである。

東かがわ市教育委員会生涯学習課

課長	野網 誠二
主任主査	安富 卓也
主任主査	成岡 正利

大川広域埋蔵文化財係

主任主事	阿河 鋭二
主事	松田 朝由
技術員	多田 歩
技術員	間崎 京子



第1図 東かがわ市位置図

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

東かがわ市は平成15年4月に引田町・白鳥町・大内町の3町が合併して誕生した市である。その市域は香川県の東端に位置し、東西に15km・南北に10km以上に及び、面積は約155㎢を測る。東は徳島県鳴門市に、西は同じく合併で誕生したさぬき市と、南は徳島県板野郡と市域を接している。その地勢をみると市の南部には阿讃山脈に連なる龍王山（標高475m）や東女体山（標高667m）がそびえ、北側にはこれらから派生する山塊・丘陵が市域の南半を占める。また、山塊・低丘陵の麓には狭小な平野が谷筋にみられる。市内には阿讃山脈を源とする弓田川・湊川や馬宿川などの河川が北流している。河川は丘陵地を抜けると蛇行を繰り返し、瀬戸内海に注いでいる。市域の中ほどにはこれらの河川の堆積によって形成された沖積平野が広がっている。河口には三角州が発達しており、海浜の砂堆とあわせ現在では市街地が広がっている。また、これらの平野部には島状に独立した丘陵が点在している。

引田城址のある引田地区について概観する。引田地区は市内の中でも最も東にあたる旧引田町の西北にあり、北は瀬戸内海に面し三方は山地や丘陵地に囲まれている。この周辺は標高100m前後の低丘陵や独立した山塊が沿岸部に迫ってきており、その間に低地部が形成されている。引田城址は瀬戸内海に突き出た標高約82mの城山に立地している。城山につづく海岸線には砂嘴と判断される、砂岩や円礫を主体とする砂礫層が重層的に堆積しており、円弧状に東に延びている。城山に南面する誉田八幡宮は陸繫島であったものとおもわれる。さらに砂嘴の後背には渦が形成されており、現在は埋積されているが低湿地となっている。この周りには「塩屋」などの製塩との関連を示す地名がみられ、海水域であったことも考えられる。南西から北東に向かってこの低地部を貫流する小海川は現在天井川となっており、流路が山崩を直線的にとおり河口手前で強く折れるなど人為的な顛覆などが行われたものといえる。

第2節 歴史的環境

近年に行われた四国横断自動車道建設工事などに伴う大規模な事業などにより、東かがわ市内においても新たに重要な成果が数多くえられることとなった。olith器時代から縄文時代にかけては明確な遺構からは、その様相の把握はされていない。山間部や河川などで有舌尖頭器や環状石斧・独鉛石などの石器や少量の土器の他、縄文時代前期と考えられる玦状耳飾りなどの遺物が知られている。縄文時代晩期になると平野部の金比羅山遺跡などにおいて、多量の突帯文土器やサヌカイト原材が出土している。弥生時代になると遺跡数は増加し、とくに中期後半から後期にかけては原間遺跡や成畠遺跡など大規模な遺跡が平野部に形成されている。また、これらの遺跡の近くの丘陵には土坑墓や上器棺墓などからなる墳墓群が所在している。古墳時代になると多くの古墳が築かれるようになるが、市内においては唯一の前期古墳であり県内で最も東に位置する前方後円墳である、大日山古墳が低丘陵山頂に築造されている。大日山古墳は正式な発掘調査は実施されていないが、堅穴式石槨内にさぬき市火川産の白色凝灰岩を使った石棺の所在が想定されている。中期になると堅穴系の埋葬施設をもつた円墳を中心に数が増加する。なかでも原間6号墳は丘陵頂部に築かれた中期前半の円墳で、直径は約30mを測り、木槧内より短甲や三累環頭大刀や鉄製農工具が出土してい

第2図 周辺遭跡位置図



る。埋葬施設・出土遺物とともに類例が数少なく、朝鮮半島とのつながりを考えさせる重要な古墳である。後期になると横穴式石室をもつ小規模な円墳が丘陵や尾根ごとにまとまって、数多く築造されるようになる。市指定史跡である引田川北1号墳や白鳥藤井古墳がその構造をよく残している。古代律令制下においては大内郡に属し、引田郷・白鳥郷・与奈郷・入野郷が設置された。平野部には南海道・条里型地割などが残り、住居遺跡からは官位を示す腰体具が出土している。また、白鳥施寺は郡内唯一の古代寺院で、土壇とともに心礎石などが調査によって検出されており、南滋賀庵寺式の御龕配置が想定されている。出土した八葉複弁蓮華文軒丸瓦や四重弧文軒平瓦などは、白鳳期にさかのほるものとされる。隣接する丘陵斜面には瓦窯の所在も考慮されている。この他、引田川北遺跡では主軸を揃えた掘立柱建物跡12棟をはじめ、縄袖陶器などの遺物が出土しており、南海道の駅家に関連する性格が考慮されている。

中世について引田城址に関する記述を城郭や居館跡についてみてみる。市内には引田城址のほかに虎丸城跡が知られており、近年の悉皆調査によって城守山城跡や黒羽城跡の所在が再確認された。虎丸城は標高400mをこえる虎丸山山頂に築かれた山城で、山頂主郭から四方に延びる尾根筋には小曲輪が連続し、堀切や畝状堅堀群などによって防御が固められている。戦国時代後期の長宗我部氏侵攻時には在地方三好氏・十河氏の最後の拠点となった。虎丸山北麓には「城の内」という地名もあり、居館の存在が推測されている。城守山城跡は大内郡と寒川郡の境付近の丘陵上に所在する。文献に記載が無くその築造期や主体者などは不明である。標高約226mの城守山山頂に主郭があり、東西につづく二つの頂部にも曲輪が築かれている。連絡する尾根稜線には土橋を掘り残した堀切が残されている。山頂以外にも北側山腹に掘切状の地形がみられ、さらに城域が広がることも想定される。黒羽城跡は引田城址から平野を挟んで南東側の尾根先端に位置する。ちょうど馬宿川が平野に抜けた間にあたり、細長い尾根は三方が急斜面となっており要害地である。尾根頂部は幅の狭い平坦地がつづき、南西先端に比高差2m前後の高くなつた小曲輪がある。ほかに白鳥城跡は平野に突き出た尾根上に所在する。北側には後背湿地が広がり、防御的な役割を果たす。造構は判明しないが、周囲には「城泉」「城ガ端」といった地名が残る。寒川氏配下の白鳥支蕃が城主と伝えられる。

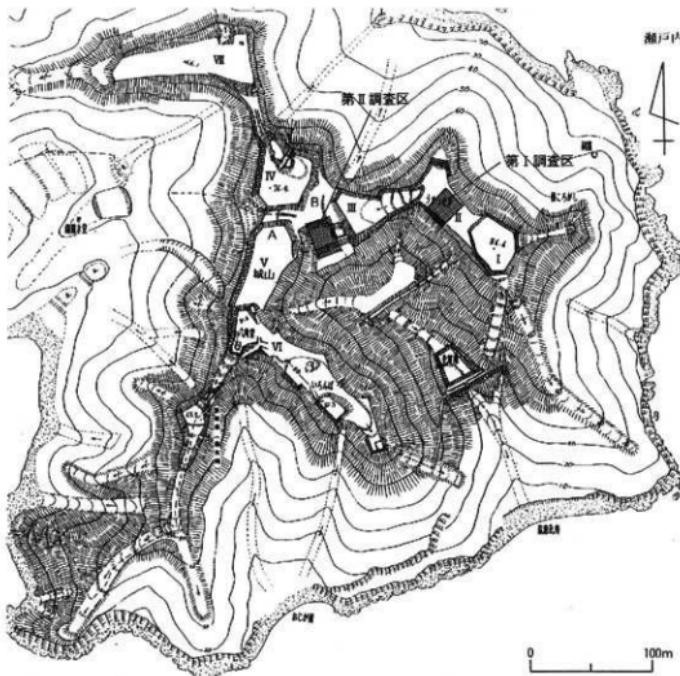
参考文献

- 『大内町史』1985 大内町史編集委員会
『白鳥町史』1985 白鳥町史編纂委員会
『引田町史』1995 引田町教育委員会
『香川県中世城館詳細分布調査報告書』2003 香川県教育委員会
『第11回特別展 講岐の古瓦展』1992 高松市歴史資料館
木下晴一「引田城下町の歴史地理学的検討」『研究紀要Ⅶ』1999 (財)香川県埋蔵文化財調査センター

第3章 調査の成果

第1節 引田城址について

引田城址は町並の北側にある瀬戸内海に突き出るようにある、小起伏丘陵の城山に所在する。城山は古い陸繫島でその麓あたりはかつて湿地帯であり、瀬戸内海に面する北から南側にかけての険阻な断崖とあわせ、その地形は自然の要害といえるものである。その眺望はすこぶる良好で海上の船舶の往来を捉えることができる。歴史的な沿革についてみると、南面する引田の町は室町時代の頃にはすでに瀬戸内海航路の主要な湊町として栄えており、古くより城山は海上支配の拠点の一つであったと考えられる。城郭としての記述がなされるのは、15世紀後半から16世紀後半の戦国時代にかけてである。引田城は東讃有力国人寒川氏から元亀2(1571)年阿波三好氏の領地となり、三好氏臣矢野駿河守が在城する。天正11(1583)年以降の土佐長宗我部氏の東讃侵攻や豊臣秀吉の四国攻めにおいては、淡路より派遣された仙石秀久が三好・豊臣方の拠点とし、長宗我部氏との合戦に及んだ。豊臣氏の四国平定後の天正15(1587)年には生駒親正が譲岐に入部し、引田城に挺るも直ちに宇多津・高松へ移り、引田城には城代が留め置かれた。関ヶ原の戦い以後の徳川政権下



第3図 調査区位置図

原図：『香川県中世城館跡詳細分布調査報告書』2003 香川県教育委員会 94頁
「引田跡城縛張り図②」(1/3,500 図：池田誠)

でも生駒氏が守りき続き讃岐を治め、東讃大内郡は一門衆の生駒甚助（正信）に分治され、引田城も預け置かれた。この後、元和元（1615）年に一国一城令が出され城郭としての機能はほぼ停止したとおもわれ、幕末までの松平氏による統治下では御林（落有林）として領有された。

次に城郭として遺存する引田城は、城山のほぼ全城を取り込んだものでその城域は400×300m以上にも及ぶ。曲輪は南東方向に開く谷筋を挟んでU字状の2本の尾根筋稜線上に、北東側最高所の標高約86mに築かれた東郭をはじめとして、それぞれ連続して築かれている。また、鞍部を挟んで北西に連なる尾根にも曲輪が築かれている。東郭は「東櫓」とも呼称され木丸的な位置にある。最高所の曲輪はやや歪んだ七角形を呈し周囲のすべてを石垣で固める。これから下る各曲輪の岸にも部分的に石垣が残っている。東郭と北郭との間は谷を利用した堀切状地形の平坦地があり、岸は折れをもった石垣がつづく。北郭は40×50mほどの広さをもち、西面には引田城址において最大の規模をもちかつ残りの良い高石垣が築かれており、高石垣は中ほどで折れるも約50mつづく。高石垣は一抱えよりやや大きいくらいの和泉砂岩・花崗岩・礫岩などを用い2段で構築される。下段は高さ約5m・勾配約60度で、上段は高さ約3m・勾配約67度を測る。また、郭内北端には櫓台ともされる巨岩の掘り残しがある。第5郭は30×70mと広さがあり、西面には石垣が残る。北郭の南側は城門跡とされる堀切で、桙形虎口状をなしている。西郭は25×100mとかなり長大で、西側と南側に石垣を残す。さらに南には「六角堂」または「西櫓」と呼ばれ、長方形の壇状の高まりがあり、南辺の石垣はほぼ垂直に高さ約2mを測る。南郭は他と違い周囲に石垣をめぐらさないが、北西隅に虎口状の窪みがみられる。その他に谷筋下方に「化粧池」がある。池の岸は精緻な石垣で囲んでおり、水源池の可能性が考えられる。他方、これまで引田城址から出土した遺物については、いくらかの瓦が表採されているのみである。軒平瓦は均筋唐草文、軒丸瓦は左巻き三ツ巴文と連珠文を組み合わせた瓦当をもちすべて焼成による。現状においてこれらの遺構遺物などから想定される年代は、石垣はその積み方から天正15（1587）年～元和元（1615）年にかけてのもの、瓦は近世初頭のものと推定されている。

以上のとく、現在みることのできる引田城址の威容は17世紀前後に形成されたものと考えられ、高石垣・瓦・礎石建物を具備した「織豊系城郭」といわれるものである。ちょうど生駒氏の統治期にあたり、生駒氏はこの他にも引田の湊町を小海川の付け替えや堀の圍繞、また短冊形地割りに身分や職業別による町割りを施工するなどし、城と町をあわせ讃岐統治における東の拠点化を図ったことがよく窺われるものである。

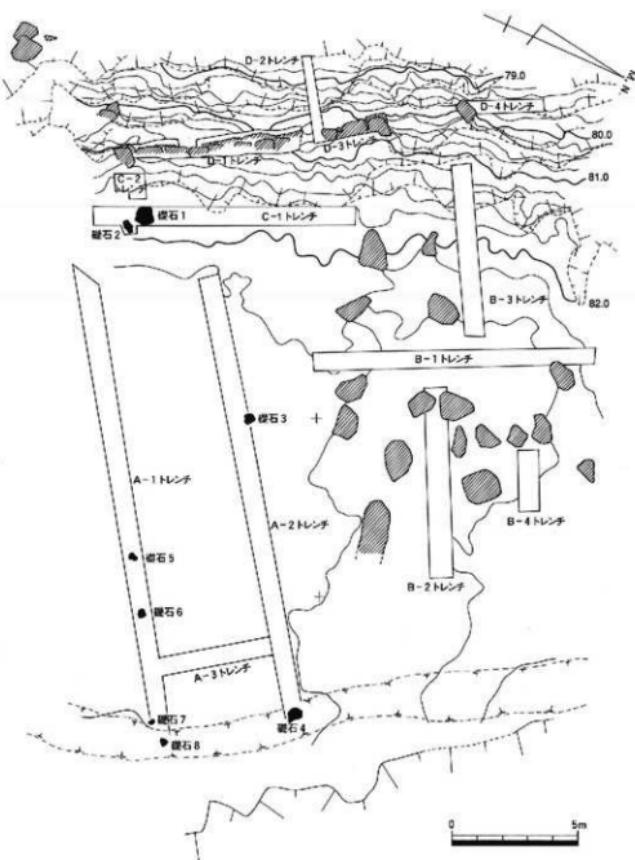
第2節 第I調査区

1. 概要

第I調査区は引田城址東郭にある3つの曲輪の内、中段の曲輪に所在する。城内最高所にあたり木丸的な位置にある、「東櫓」と呼称される曲輪のちょうど北西手前側、一段低い曲輪に設定したものである。この曲輪も俗に「馬つなぎ」と呼称されており、尾根の稜線を改作し幅25m・長さ60mほどの広さをもつ。調査区はこの曲輪の内、北西端に幅25m・長さ20mの長方形に設定したものである。曲輪内の調査前における状況では、戦前以後使用されている北郭から「東櫓」に通じる歩道が、曲輪東縁に沿って延びている。また、曲輪内には松をはじめとする雑木が繁茂しており、歩

道以外では観察が困難な状況にあつた。ただ、歩道には建物礎石であろう平石が2個ほど露出していた。さらに範囲外にはなるが、曲輪北東端では海岸線に通じる尾根稜線を遮るように、地山を掘り削り出したであろうが岩盤が残されており、3箇所ほどには方形の打ち込み認められる。この他、明瞭ではないが縁端部には石垣の一部を確認できる。なお、戰前には引田城跡のある城山が花見などの名所として利用されており、一部においてコンクリート製などの建物基礎の痕跡が確認される。

確認調査は雑木の伐開後に落葉を除去した状況で地



第4図 第I調査区地形測量図

形測量を行い、幅90cm前後のトレンチを長短合わせて十数カ所に設定した。地形測量の成果をあわせ地表面を観察すると、曲輪の平坦面は標高82m前後を測り、横断において東縁から約20mまで広がり、それより西へは傾斜面となっている。傾斜面において一抱えほどの石材の並びが確認されたことから、石垣の所在を想定することができた。なお、この石列から下方は谷筋に向かってかなり急激な傾斜となっている。他方、平坦面には1mをこえるようなものを含む石材が10個以上もみられた。これらはおおかた露出しているものやほぼ埋没しかけているものなどがあるが、平坦面のおおむね北側に集まっているものといえる。さらにこの石材分布範囲にはようやく視認できる程度

であるが、30~40cmほど高くなつており壇状を呈するものである。

2. Aトレント

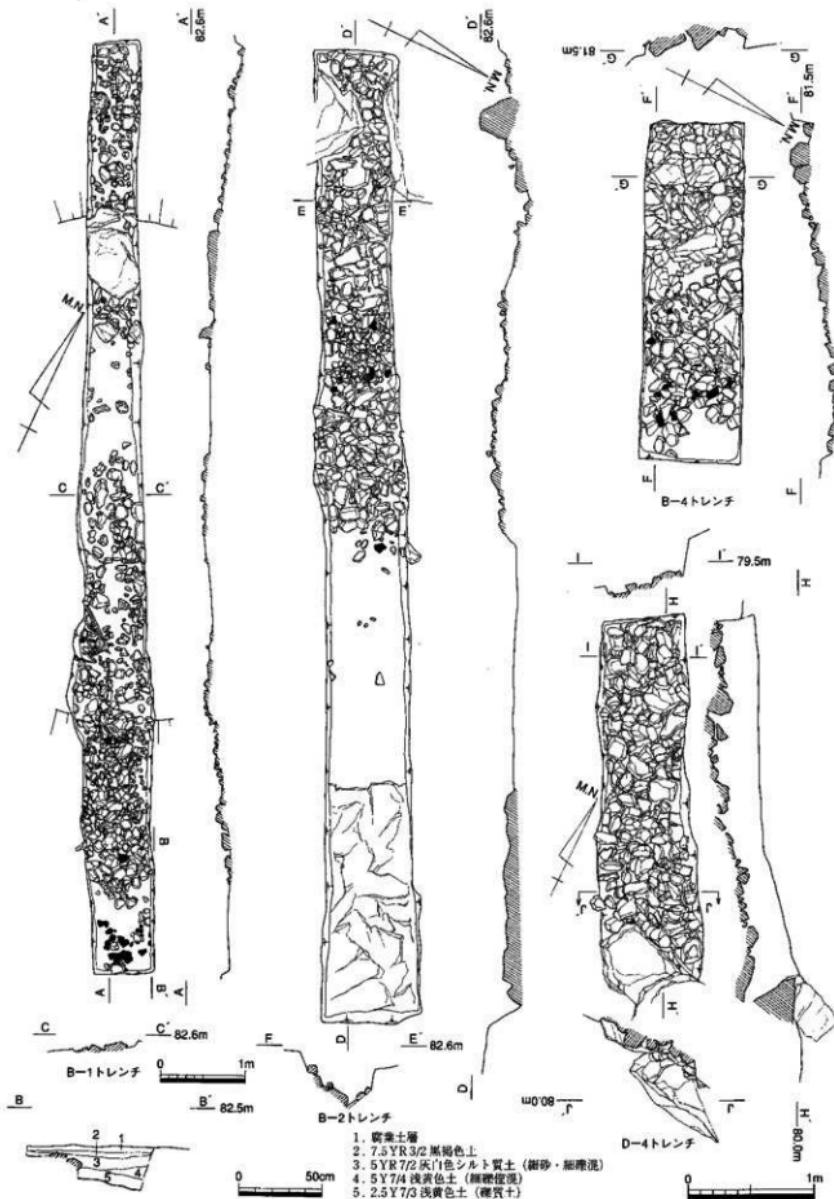
Aトレントは調査区内平坦面の南側において、曲輪横断を通るように設定したものである。北と南の2本が平行するように、またこれらを繋ぐ1本をやや東よりに配した。A-1・A-2トレントは露出していた平石を基準に、直交するように掘削した。検出された遺構として、A-1トレントでは新たに建物礎石と考える平石が3個検出された。礎石5は礎石8より約7.2mの距離があり、礎石6と礎石5の芯心での距離は2.2mを測る。さらに礎石6から礎石7にかけては約4.2m離れており、礎石7と礎石8の間は0.9mほどである。礎石の大きさは礎石7以外が長さ30~40cmほどであるが、礎石7は一回り小さいものである。礎石上面はだいたい平滑な面をなしておらず、おおむね標高82.2mで揃うものである。A-2トレントにおいても礎石3が検出された。礎石4より約11.8mの距離がある。なお、掘り下げはしなかつたが、この二石のほぼ中間のトレント北側間にて礎石の所在を確認している。礎石上面はしっかりとした平滑な面をもつ。やや礎石1が大きく、レベルにも差がみられる。他方、A-3トレントはA-1トレントでの礎石の並びに合わせて、直交するように掘削したが、岩盤のみで礎石は検出されず岩盤にもおぼしき痕跡は見あたらなかった。各トレントからは多量の瓦片が遺物として出土した。A-1トレントでの出土状況をみると、標高で82.3m前後を測る地表土直下の暗褐色系土と標高82.2mを測る白黄色系土において層位的な出土を示す。とくに下位の白黄色系土での出土状況は瓦片が突き立ったものがみられるなど一様ではなく、土中に包含されるものといえる。

3. Bトレント

Bトレントは上述した壇状を呈する一段高い平坦面に配したもので、十字状に計4本である（以下、壇状遺構と称する）。トレントを掘り下げた結果としての特徴は、すべてのトレントにおいて拳大ほどから長さ1m近くの石礎が、壇状遺構の表面を覆うように確認されたことである。南北方向に設定したB-1トレントでみると、トレント南端から1mのあたりに礎の広がりが途切れたり、裾部がめぐるものと考えられる。礎の上面は標高約82.15mにあり、この裾部から約2m北側に傾斜の始まりがある。傾斜変換点は標高約82.40mで比高差はわずかに25cmほど、傾斜はきわめて緩やかといえる。壇状遺構の上部平坦面は南端から9mまでつづき、そこから北側に向かって傾斜面となりトレント北端が裾部に相当するとと思われる。北端の標高は82.0mで傾斜の幅は3mほどで、さらには緩やかな傾斜である。礎の検出状況をみると、傾斜面には比較的小振りなものが密に用いられている。これと比して平坦面は疊らな状況で、中ほどにはほとんど所在しない範囲もみられる。また平坦面北端の傾斜変換点に位置する所には、100×70cmをこえるような大きい石材が確認される。

東西方向のトレントをみると、B-2では東端から約2mまでは岩脈がある。石礎は東端から約4mあたりで見ることができ、トレント西端まで密に充填されている。岩脈の上面は標高約82.40mで、裾部礎は僅かに高いくらいである。石礎は裾部から1mくらいまでやや低い盛り上がりをみせ、平坦状に続いている。この平坦になっている範囲は60cmほどで、使用している礎も小礎を多用している。平坦範囲から西にかけては再度中ぶりの礎となる。これよりトレント西端までの間については、東端より1mのところに径が約40cmを測る円形の窪みがある。深さは約30cmで精巧とはいえないながらも、礎を組んでいる様子が看取された。

壇状遺構西半に設定したB-3トレントは、トレント東半と西端の2カ所において石礎の広がり

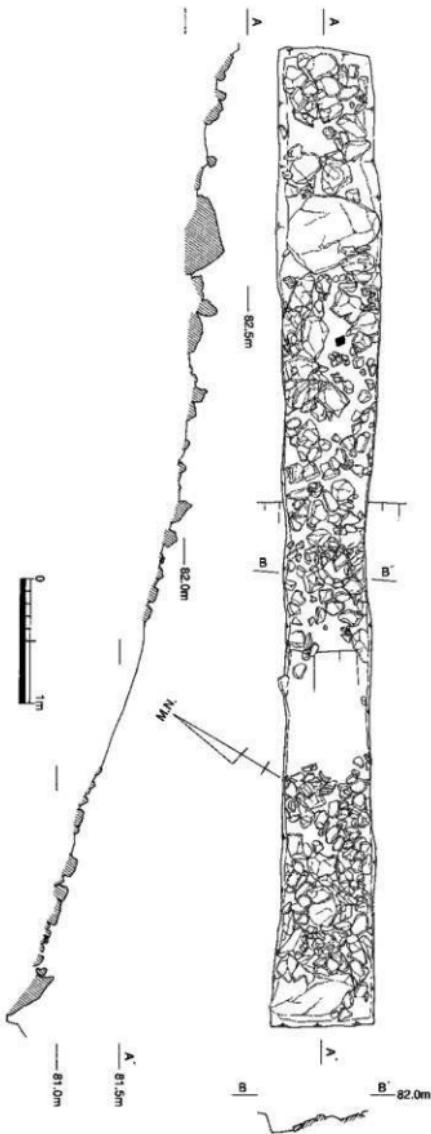


第5図 トレンチ平・断面図①

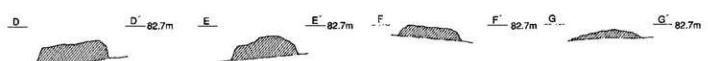
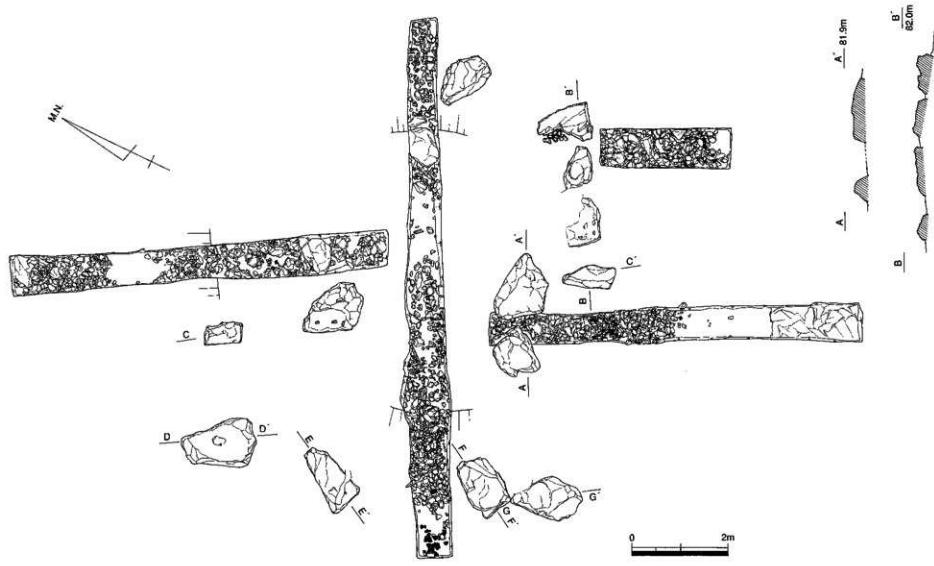
が確認された。東半についてはトレンチ東端より約3mまでが壇状造構の平坦面である。それより西にかけてはやや緩やかな傾斜となり1.5mほどで途切れることがから、裾部と判断される。裾部の標高は約81.7mを測る。礫にはやや大振りのものが目立ち、それほど密にはならない。裾部についても配石は厳密ではない。なお、平坦面においてトレンチ西端より1.5mにところに、長さ80cm・幅60cmの大型の石材が配されている。この石材の上面はだいたい水平となっている。これより西に向かって傾斜はやや勾配を強め石礫のみられない範囲が1mほどあり、これより西の方は再度石礫が密にみられる。標高約81.35mから下方に続く石礫はある程度大きさがまとまるが、中には長さ70cmをこえるものが含まれている。この西端の石礫については壇状造構に伴うものではなく、曲輪西端の石垣裏込めに用いられたものと思われる。

B-4トレンチはB-2トレンチに平行するようにやや北側において設定したものである。比較的小振りな礫を主体に、やや大きめの礫が密に配されている。トレンチ東端近くに裾部とおもわれる礫のとぎれがみられる。傾斜の変化はそれほど明瞭ではないが、縦断面図でみるとトレンチ西端から50cmほどが平坦面とみられる。傾斜変換点から裾部まで約2mで、トレンチ西端における礫上面の標高は約81.6m、裾部との比高差は約20cmと緩やかなものである。

次に壇状造構地表面に所在する石材についてであるが、今回の調査では明確に壇状造構との有機的な関連性の有無を把握するには至らなかった。ただ、壇状造構平坦面内に所在するものは、比較的露出しているという状態ではないことが指摘できる。東辺から南辺にかけて確認で



第6図 B-3 トレンチ平・断面図



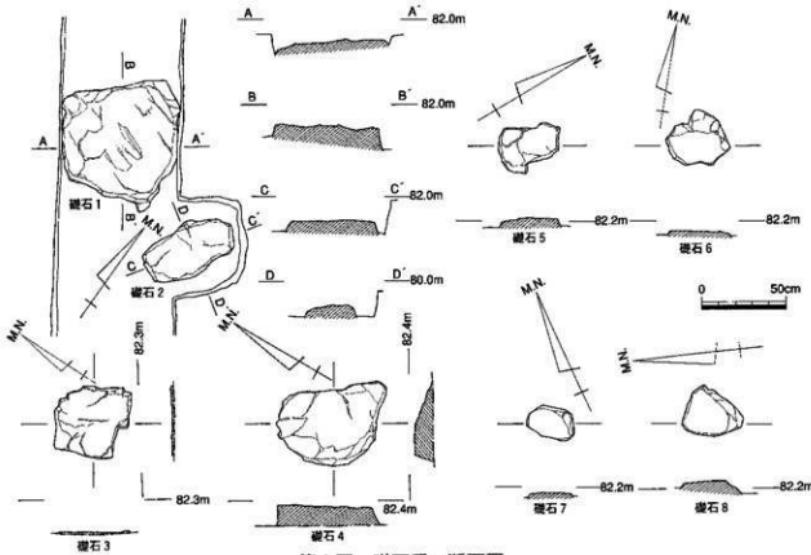
第7図 Bトレンチ調査状況図

きた8石は南東に隅部をもつL字状に直線的に並んでいる。東辺の4石は石材上面もだいたい揃うようである。また、南辺の石材も同様である。このうちの南側から2個目の石材には矢穴を3箇所に有している。他方、壇状造構の斜面または外に所在する石材は、前者より大きな個体である。

Bトレンチにおける遺物の出土状況は、B-1トレンチ南端を除いて縦検出までに、バラバラと瓦片が出土したのみである。他方B-1トレンチ南端において瓦片がまとまって検出された。全トレンチにおいて断ち割りを行ったのはこの部分だけであり、調査区全体の様子をしめすものとはいえないが、ここでこれらの瓦片の出土状況を土層で確認すると、灰白色土に包含されるものである。基本層序は地表面から約30cm下に岩脈である基盤土があり、北から南にかけて緩やかな傾斜をなしている。基盤土の直上には浅黄色土があり、僅かであるが瓦片の出土があった。層厚は10cmほどで、地盤土に沿ってやや傾斜している。またこの傾斜を水平に埋めるように相似した土層が確認される。基壇状造構の礎部はこの浅黄色土上位にくるもので、瓦片の大量出土をみた灰白色土はおおむね礎群を覆うように浅黄色土上に堆積している。灰白色土は層厚10cmぐらいで上面はおおむね水平となっている。この土層序をみるとかぎりにおいて、浅黄色土・灰白色土はともに人為的結果といえ、造構の時期差を伴うものと考えられる。

4. Cトレンチ

Cトレンチは調査区平坦面南西側に設定したものである。ちょうど残存する石垣のある傾斜面にかけて変化する手前にあたる。主となるC-1トレンチは長さ約10.4mで、検出された造構としてはその南端において建物礎石1・2がある。礎石1は長さ80cmをこえる方形状のものである。表面はやや剥落などがみられるが整形痕ではない。上面の標高は約81.9mである。明瞭な掘方は確認し



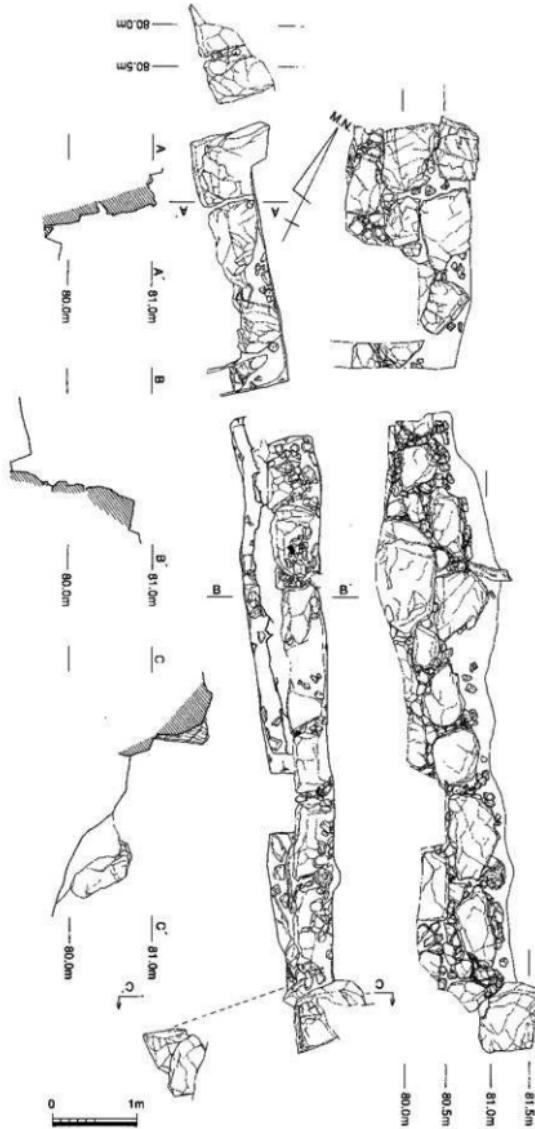
第8図 磊石平・断面図

ておらず、トレンチ底面の黄色土に包含されている。礎石2は礎石1の南側にあり、10cmと離れていない。その大きさは55×30cmと小さく、A-1トレンチにて検出した礎石と同規模である。トレンチ北端では壇状造構の裾部が検出されるものと考えたが、礎は確認されなかった。ただ、トレンチ底面では土層の変化がみられた。精緻な黄色土にたいし、小疊混じりのやや締まりのない土層との層界で、北端の東から西にかけて直線状に延び、さらに直角気味に南に屈折する。これと同様に礎石1の北側にても層界があり、C-2トレンチにおいてはトレンチの真ん中を縦断するように層界が延びる。北側の精緻な黄色土に対し南側は疊混じり土であった。

出土遺物は瓦片が僅かであるが、C-1トレンチ掘り下げ中に鉄器が出土した。ほぼトレンチ底面で精緻な黄色土に包含されたものである。

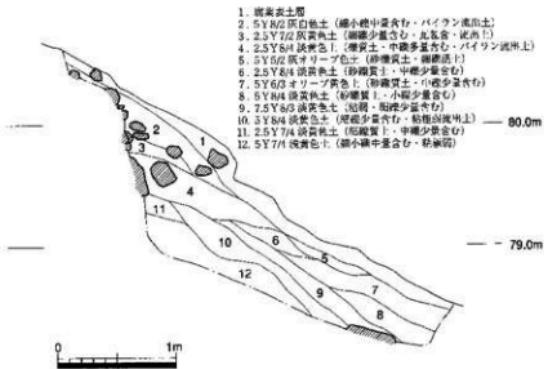
5. Dトレンチ

Dトレンチは調査区西端の傾斜面に設定したトレンチである。前述したように曲輪の所在する尾根斜面にあたり、伐開後



第9図 Dトレンチ石垣平・立・断面図

石垣の残存が明瞭に確認された。この傾斜地は石垣直下あたり腐葉土などで足場があるが、これより下は急激な斜面となっている。まず、石垣は標高81mの等高線に沿うように調査区南端から11mぐらい北につづいている。これより北側では礎石とおもわれる石材が何個か、地表面に転落しているのが認められるのみである。石垣は南端の築



第10図 D-2トレンチ東壁土層図

石を現状での最高所とし、標高は81.5mである。一方石垣北端で確認した3段の下段が石垣根石である。標高約79.4mを測り石垣の高さは現状で約2mを残すものといえる。現状の曲輪平坦面の天端が標高約82mに少し届かないくらいなので、本来的にはあと50cmほどの高さは築かれていたものとおもわれる。石垣には長さ70~100cmほどの石材を使用し、砂岩・花崗岩・砾岩などが含まれている。砾岩は砾を多量に包含しているもので、縄張り内の城山に見ることができる。石材は自然石や粗削り程度の花崗岩の低い状態のもので、形状も歪で表面もかなり荒いものとなっている。石垣の全体を概観してみて、はっきりとした目地は通っていないといえるが、おおむね布積みを指向したものといえる。石材の仕様が上記のごとくであることから、石材と石材の隙間を埋める小砾を多用する。おおむね根石から2段分の高さ、90cmほどは多少不揃いではあるが作業単位としての意識が窺われるものである。3段目は下2段の状況に規定され砾を充填しながら横間に石材を積み上げている。石垣南端の高さからみると、さらにこの4段目が次の作業単位としていたものとおもわれる。石垣断面は約80°の傾斜である。

他方、平面でみると石垣南端から斜面を1mほど下ったところにおいて、石材が2石ほど地表面にて確認される。石材上面での標高は約80.7mで、おおむね2段目に相当するものといえる。この石材は北に面を向けており、この面を斜面上方にたどると石垣南端築石の直下にある縦位に積まれ、石垣からやや突出した配置の石材の外面と合致する。このような状況から関連性が高いものとおもわれ、石垣南端築石とともに入隅にあたるものと想定する。石材の配置状況からすると人隅が先行して築かれたものである。

石垣の北側に位置するD-4トレンチは曲輪平坦面の奥から大きく崩れた状況であった。数個ほど大型の石材がみられたが、石垣の延伸が残存している状況は把握できなかった。トレンチ掘削においては多量の砾が密集している状況であった。横断面でみるとおおむね傾斜に沿ったもので、縦断面では南から北にかけて緩やかに傾斜している。トレンチ南端において大型石材が重なっている。このような状況からみてD-4トレンチは石垣が裏込めから崩壊したものと考えられる。

斜面に直交するD-2トレンチでの土層からみると、石垣基底石は基盤土とする黄色土に配置されている。この基盤土は石垣下からいったん小さい傾斜面となり、幅40cmほどの平坦面となってさ

らに急傾斜面となっている。平坦面は犬走りの可能性も考えられる。これより上の土層は流出土とを考える。下位にある6～10層のうち、9・10層は黄色系のやや弱い粘質土で、6～8層は砂質土である。基盤土の傾斜なりに堆積しており、トレーナ底面ではやや大きい石材を覆う。より上位の2～4層はバイラン質で礫を多く含む。

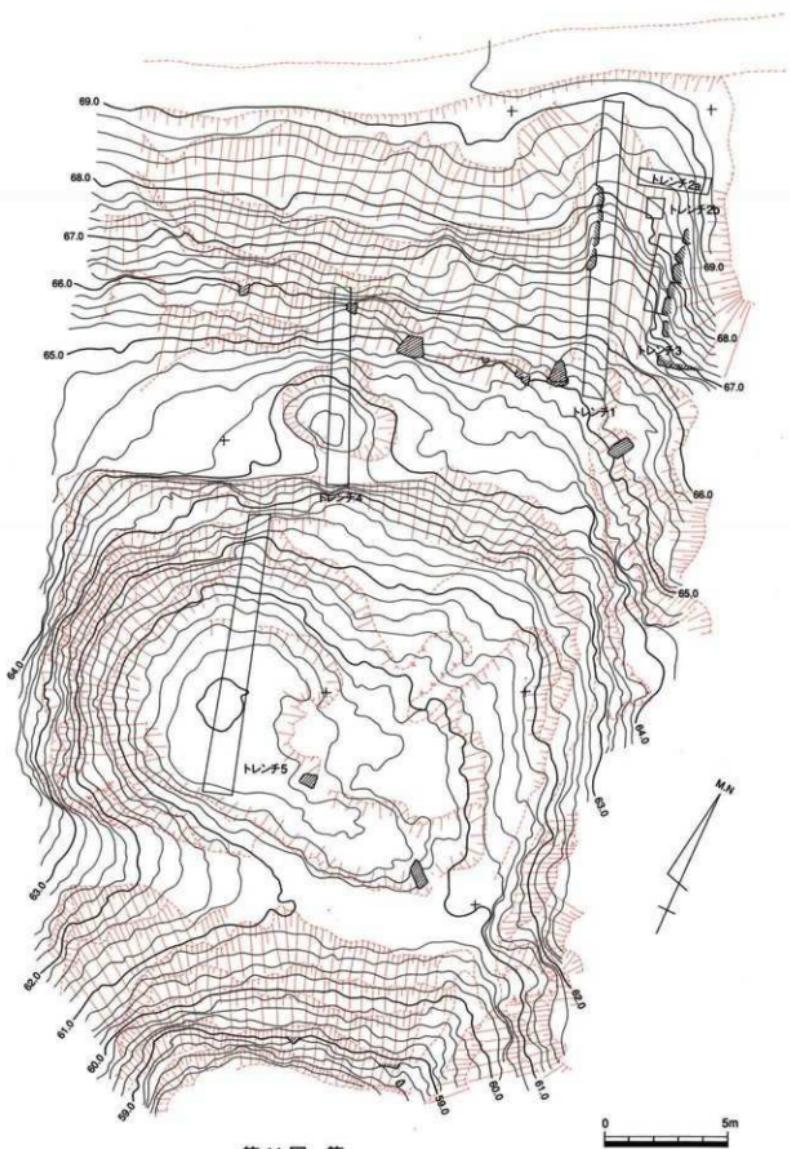
第3節 第II調査区

1. 概要

第II調査区はU字状に延びる屋根のちょうど付け根にあたり、南東方向に下っていく谷筋の入口に該当する。すぐ北西側は高石垣を擁する北郭となっており、これから一段下がるとやや狭い平坦地があり、東部にいたる分岐をなしている。第II調査地点との比高で約13m下がったことになる。また、谷筋を下って行くと石垣によって区画された「化粧池」と呼称される貯水池が所在している。ただ、「化粧池」と呼称される施設については、今回の第II調査区内に位置するという説明もある。調査は第I調査地点に統いて伐開、地形測量を実施し、トレーナを設定した。調査前は第I調査地点よりも増して雑木が繁茂しており、傾斜地に立ち入っても遺構についての把握は困難であった。

地形測量の結果をもとに現況を概観すると、調査区内は微地形的に大きく4つに区分される。一つは調査区北端高所からの傾斜地である。遊歩道となっている小規模な曲輪の縁部から下方へは、約30°の傾斜となっており、水平距離にして9～10mで約5m下る。このうち上方の取り付きは比較的緩やかだが、中ほどからきつくなる。地表面には多量の礫を認めることができ、下端には長さ1mほどの石材もある。他方、傾斜地東側は上方から大きなえぐれが入っており、下端まで地形の乱れが延びている。このえぐれの中ほどから下端にかけては東西両側において、傾斜に直交する石垣の一部が確認された。石垣の間は約3mを測り、東側は中ほどにて内側にせり出してきており1.5mになる。また、東側石垣の下端は隅部で東に折れてさらに延びていく。東側石垣によって区画された範囲は上部の傾斜変換点も同様な形をなしており、地表面には拳大の礫が多量にみられ檜台として把握することができると思われる。次にこの傾斜を下ると幅5mほどの平坦地になっている。ちょうど真ん中には5×3.5mほどの大穴が穿たれている。この平坦地の東側は東郭尾根の裾部とおもわれる緩い傾斜が延びている。一方、平坦地の南縁は西側で明確な段地となっており、一部に石積みが確認された。段地の高さは約1.5mを測る。次に平坦地から下方は傾斜面となっている。西側は西郭尾根の裾部が急斜面となって迫り、南側には後述する土堤があつて全体的に大きなクレーター状の窪みを呈している。一方で東側は東郭尾根裾部が巡るもの、それを開削した小径が上方平坦地より延びている。小径より内側に向かっては攪乱や倒木などもあって乱れてはいるが、かなり緩やかである。窪みの底面は標高約60mで、比較的平坦である。なお、この範囲が「化粧池」と呼称されるもの一つである。次に窪地の地形に統いて谷筋をせき止めるかのような土堤が東西両尾根を繋いでいる。この土堤上面は幅約2m・長さ約10mで、東側小径からは緩やかに連絡し、西側尾根にかけては急勾配となっている。なお、土堤上面の中ほどでの標高は約61mで、北側窪地よりも1mほど高い。土堤の南側は20～40°の勾配となっており、測量範囲内には明確な裾部が取まっているが、それでも上面とは約3mの比高差を有している。谷底には相当量の堆積が考慮されることから、本来はそれ以上のものと想定され谷底下方からの視覚的効果は大きいものといえる。また、南側斜面下方には転石以外の石材も表面に見ることができ、その構造物の可能性が窺われる。

上記のような地形的特徴は、それぞれ城を構成する遺構についてそのあり方を示すものといえる。

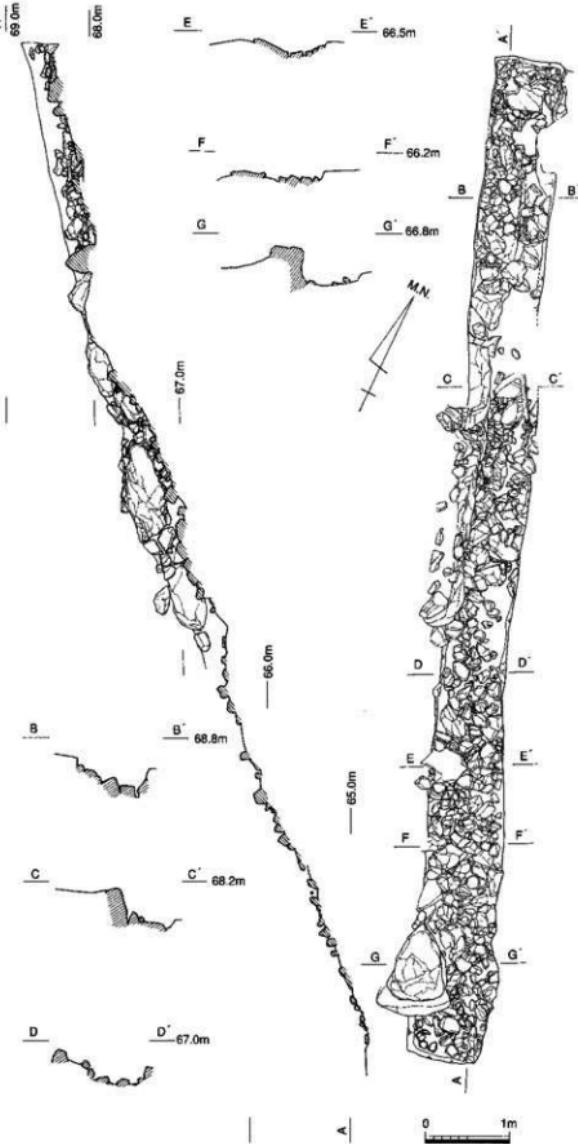


第11図 第

今回は土堤を除く各部分についてトレントを設定したのである。

2. 1トレント

北側上方斜面のうち石垣が残存するえぐれ部についてであるが、その様相から虎口が想定される。まず西側について確認することのできる石垣ラインをもとに、傾斜に直交して設定したもので長さは約12mである。地表面で確認されていた中段の石垣以外では、上方においてその続きがトレント北端まで確認された。一方の南側に向けては想定できる石材は確認されなかつた。また、石垣築石面の内側では多量の砾が検出された。石垣についてであるが、使用された石材は第I調査区と同様の材種で、長さ1.2m・面積0.6m²くらいを最大とし、横位に積み上げている。ほかにかなり小型ではあるが間詰石とするには大きな石材も用いている。現状では階段状に残るものでそのトレント

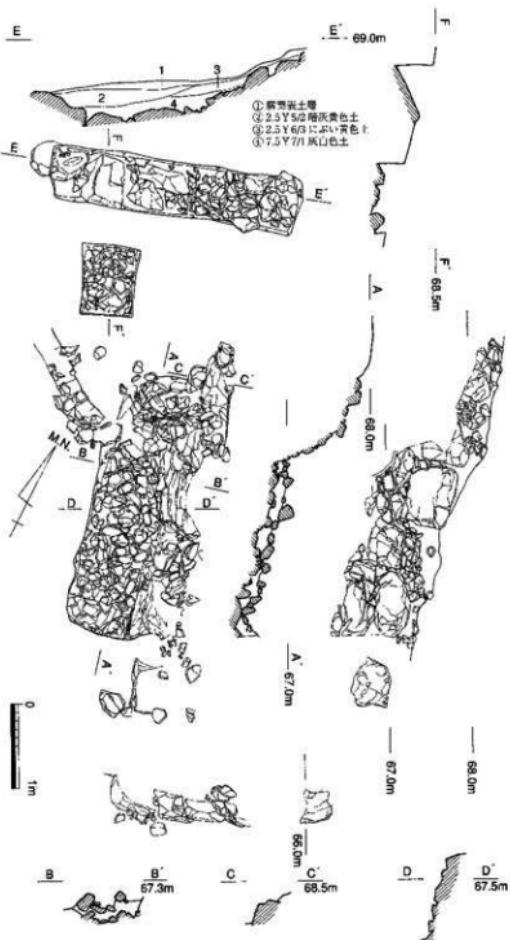


第12図 1トレント平・立・断面図

底面を蝶検出面として留めているため、根石の推定や往時の地表面での高さの推定は困難である。トレンチ北端で確認された礎石は上面が68.1mで、一方の南側のものは67.2mである。ここで南端の67.2mを基準とすると、次は67.7m、68.1mとなり3段分の高さとなる。次にトレンチ内側の状況であるが、蝶は小振りなものが多く、雑然とする検出状況である。北側のものは裏込めがくずれたものであろうが、南側のものは密集度が高い。縦断面みてみるとトレンチ北端から3mほどの間は、蝶検出面は緩やかな傾斜であるが、これは途中に樹根があるためであろう。これより下方へは20~30°の勾配をもつ傾斜だが、狭小ながらも平坦となっている部分を幾つか指摘できる。横断面Fにみられるようにおおむね上面が水平をなすものもあるが、具体的な構造については不明である。

3. 2トレンチ

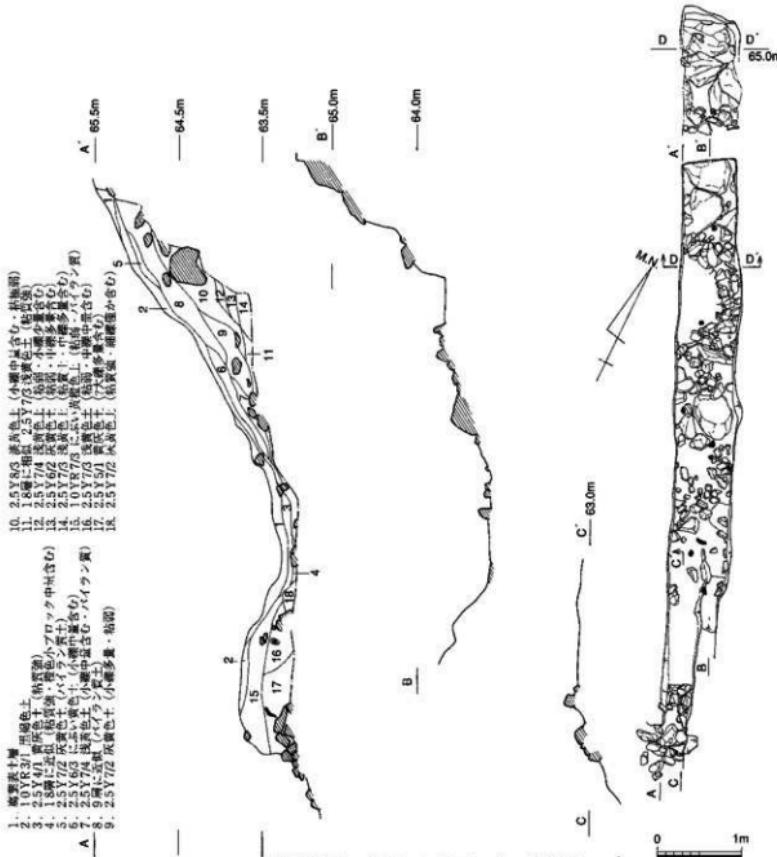
1トレンチ北端に正対する位置での、東側石垣の残存状況について知るために設定したものである。さらに東側には傾斜がかなり緩くなっていくが、檣台上面へとつなぐ。トレンチは東西方向で檣台の斜面と直交し、長さは3mである。トレンチ東端から中ほどまでは拳大の蝶ばかりで、地表面に沿った緩やかな傾斜で西へ下る。中ほどから西側には大きな石材が数個みられる。西から二つ目は南北方向に収まるが明瞭できない。2-bトレンチはさきほどの石材の位置から南に延伸した、1m²のトレンチである。検出面は2トレンチより低くなるが、蝶が密に検出されたものである。大型の石材の有無については不明である。



第13図 2・3トレンチ平・立・断面図

4. 3 トレンチ

横台の隅部をなす石垣にあたる。現状で虎口の幅が狭まる中段の位置から隅部にかけて設定したものである。隅部の築石から約5m北側上方に向けて石垣が連なる。石垣には西側石垣と同じような細長の石材を横位に積み、間詰石を充填する。隅部の最下段築石は下底が標高約66mで、北側のものは標高約68mを測り、5段分を残すものといえる。残存状況からでは標高67m近くの石垣3段目にて、横目地がとおることが看取され布目積みといえる。また、現状での横台天端は標高約69mで、隅石からは3mの比高差となる。斜面地表面に見ることのできる相当量の礫は、裏込石ともわれる。なおトレンチは現状で石垣に接して虎口内面へ張り出す、クランクの直下から石垣沿いに約3m設定したものである。まずクランクは石垣の上端から幅1.6mほど内側に張りだしている。さらに北側上方に向け角をなす。張りだしは礫を主体にして高さ80cmほどの壁体をなしている。明確に人為的な積み上げによるものかどうか判断しがたく、横台の裏込石が流出したのを樹根などが止

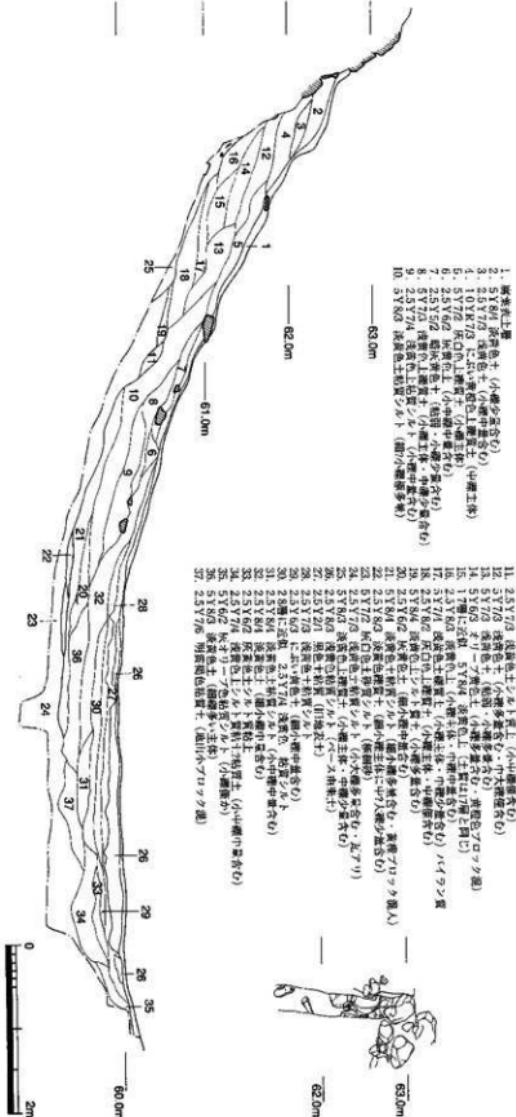


第14図 4トレンチ平・立・断面図

めたことも考えられる。トレーニング底面は1トレーニングと同様に、柱大またはやや大きめの礫が密に検出された。なお3トレーニングでは上位礫検出面からさらに掘り下げを行ったが、変わらず礫が多量に検出された。かなり乱雑な様相を呈している。

5. 4 トレーニング

概要にて記した上方斜面下に位置する平坦面に設定したものである。ここでは中ほどにある窪みの状況を窺うため、南北方向に斜面上から窪みをとおるトレーニングとした。トレーニングは長さ約6.6mで上端は標高約66.5mにあたり、下端は段地下である。平面でみると上方斜面には比較的大きな石材が二・三個検出されている。傾斜に沿うような勾配をもっている。一方、下位には柱大の礫の集中がみられるが、トレーニング西壁際ではみられない円形状を呈している。これより南下には大きめの石材とともに小礫が緩やかな傾斜でもって、窪み底面にかけて散漫に検出された。これとともに軒平瓦などの出土をみていく。窪み南側の段地ではその下端にあたるトレーニング底面にて、礫のまとまりがみられる。他方、上方傾斜と窪み、平坦地の関係であるが西壁での土層をみると、上方斜面には腐葉土の直下に第2層である、黒褐色土が傾斜に沿って堆積



第15図 5トレーニング土層図及び立面図

している。基盤土は第14層とみられ、標高63.8m前後から傾斜を強めていくとおもわれる。また、窪みの掘方南側の平坦地上面が標高約63.7mであることから、窪みの凹状もおおよそこの高さまで平坦であったとおもわれる。土層からみると平坦地は盛土によったことが想定でき、第15~18層はこれにあたるものであろう。第17層には礫が埋め込まれており、瓦片を含んでいる。第11層は基盤土と高さを整合してみられ、その土質などからも平坦地の盛土とおもわれる。また、第4・11・18層は近似した土層であることから、一連の盛土と理解される。表面でこの窪みの掘方北側縁部とおもわれるのは標高約64.4mあたりである。この変化を下位でとらえると第10層に掘り込まれたとみられる傾斜がある。第4・11層の上面が示す傾斜もこの時の影響を示していると考えられる。なお、土層のかぎりでは炭化層や被熱化した痕跡は確認されない。遺物は第18層などに突き刺された状態の瓦などが出土している。

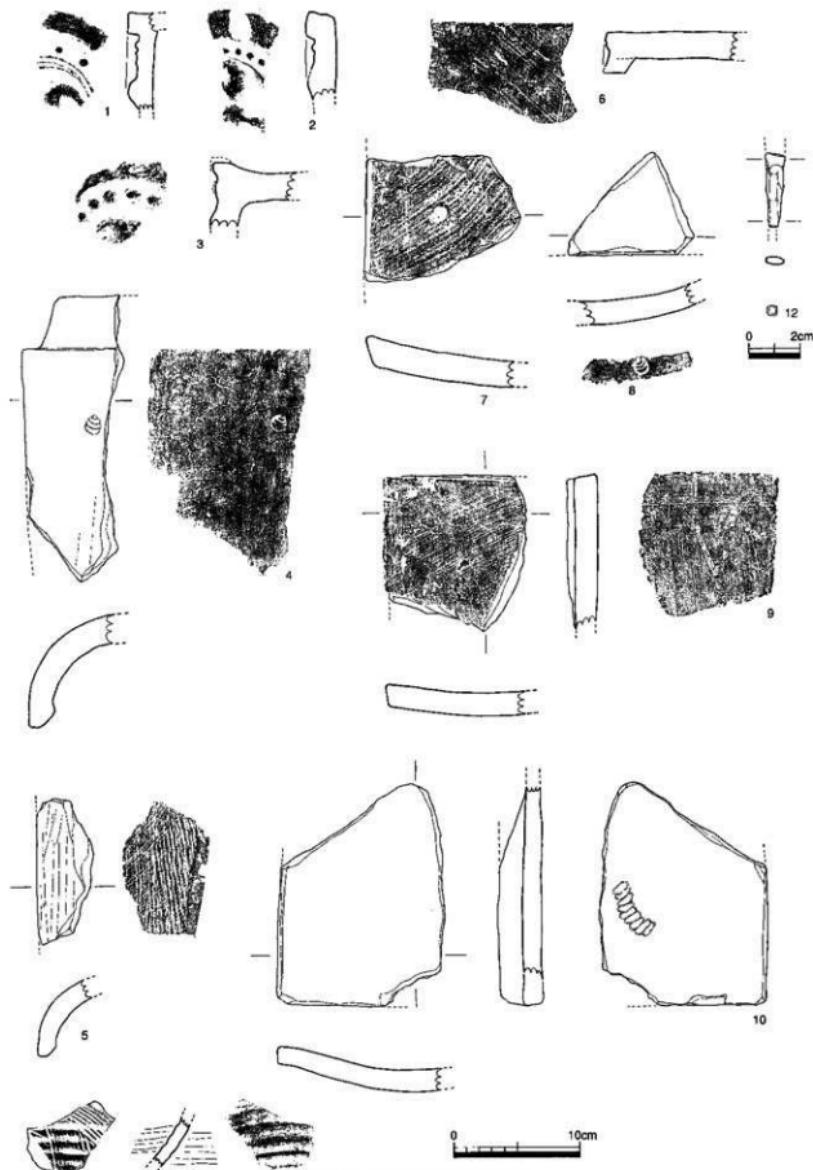
6. 5 トレチ

クレーター状を示す窪地について、最も底部を示す部分をとおるように南北方向に設定したものである。トレチは長さ約12mで、北端から南端まででは3.5mほどの比高差がある。トレチ上端には石堀とおもわれる石積みの残存がみられる。残存状況は良くはないが、上段平坦地との関連が想定される。南端については土堤の間際である。石積みは3段が残る。やや下にも石材がみられるがはっきりとは確認されない。トレチ東壁で土層をみると、おおむね地表面から80~90cmは掘り下げたが第24・25層からも瓦片が出土しており、基盤上と考えられる土層は確認できなかった。ただ、これが人為的なものか自然流出によるものか検討を必要とする。トレチ北端においてみられる第11~19層などは細礫を含む黄色系の土であり、水平に積み上げた様子が看取でき石積み直下まで及ぶ。窪地底部では粘質シルトの第24層が広く堆積しており、その上位には薄く砂質土がのり、さらに粘質シルトや疊混じり土が積層している。地表面では旧表土の上に精良な黄色粘質シルトが堆積している。なお、「化粧池」との指摘もあるが滞水を示すような上層は確認できなかった。

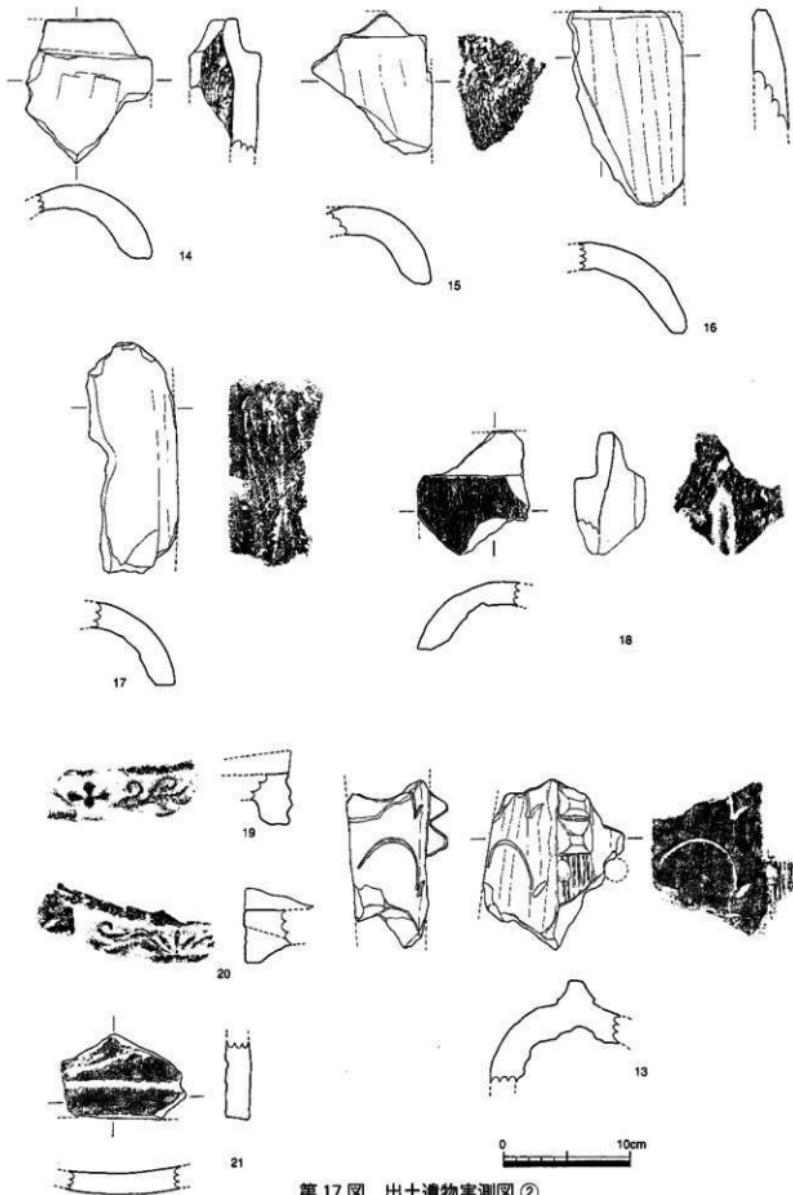
第4節 出土遺物

今回の調査では第Iと第II調査区合わせると、コンテナにして30箱をこえる量の遺物が出土している。種類としては瓦がそのほぼ全てであり、その他には土器・鉄製品がごく僅かである。また、位置的には第I調査区Aトレチが最大である。第II調査区ではその地形的条件からかまとまった出土はみないが、軒先瓦などが出土している。瓦はいずれも大なり小なり破片で、完形に復されるものはみられない。図示した出土遺物のうち1~13が第I調査区で、14~21が第II調査区である。

1~3は軒先瓦の破片で文様は三巴文である。2・3は摩耗で瓦当の残りが良くない。1は圓線内に巴尾がつながり圓線状をなしている。1・3はD-1トレチ、2はD-4トレチからの出土である。4・5は丸瓦である。4は凸面に宝珠文をスタンプ状に押捺している。5は凸面にナデをよく残し、凹面には布目・荒いしわ状の条痕及びコビキA手法を残す。4はA-2トレチ、5はB-2トレチからの出土である。6はA-1トレチ出土の軒平瓦であるが、瓦当の残りは良くない。凹面にはコビキA手法を残す。7~10は平瓦である。7・9はともにD-1トレチからの出土で、凹面にコビキA手法をよく残す。8はA-1トレチ出土で、4と同様に側面に宝珠文を押捺している。10は凸面に形状・意味とも不明だが、押厚による浅い窪みが連続している。A-2トレチからの出土である。11はD-1トレチ出土の備前焼擂鉢である。縱方向に重ねて卯



第16図 出土遺物実測図①



第17図 出土遺物実測図②

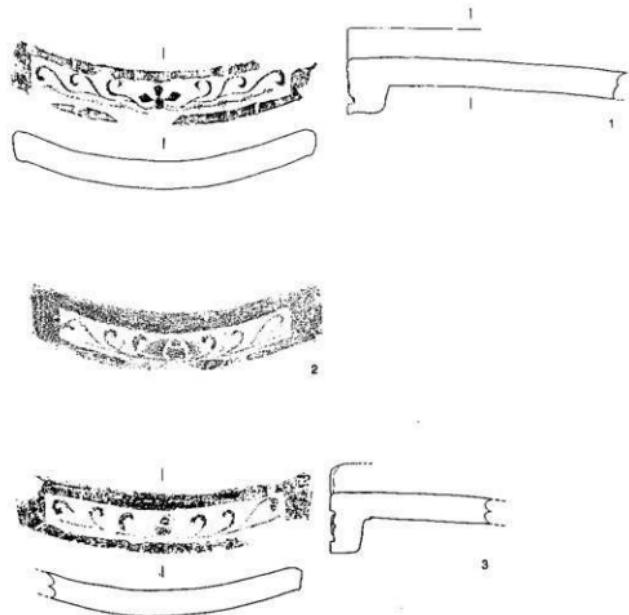
目が斜め方向に入るるものである。12はC-1 トレンチ出土の鉄製品である。棒状をなすが、断面からみると鎌などの茎部であろうか。13はB-2 トレンチ出土の瓦である。すでに小破片となっているが、おおむね横断面がすばまっていることから尾鱗に近い部分とおもわれる。まず背鰭は底辺が2.5~3 cmを測る四角錐を呈し、頂部は摩耗によるものもあるが鋭く尖ることはない。中心から外方にむけての側面にはオサエなどの調整が残るが、対する2面にはこれがみられず、裁断された様である。また、連結する部分などからしても個別ごとに造ったものではないと想われる。体部との接合では、体部側に沈線を数条施している。体部についてはナデによる調整が顕著に残っている。また、鱗の表現として「て」の字状に沈線を描いている。尾鱗よりに短い直線を施し、それに統けて半円形を描いたもので、概して粗大なものといえる。また、釘穴が穿たれている。内面についてはかなり強いナデ状のケズリで、凹凸が顕著である。

第II調査区のなかでは4 トレンチが比較的出土遺物を把握することができた。15~18・20・21が4 トレンチからの出土で、残る14・19が5 トレンチからの出土である。14~18は丸瓦である。14は凸面に板状のナデを残し、一部段状になっている。凹面にはしわ状の条痕がみられ、わずかに布目の痕跡をとどめる。15は表面の剥落が激しいが、凹面には僅かにコビキA 手法がみられる。16は玉縁のつかないものである。凸面にはナデが顕著である。17は凹面にコビキA 手法を残す。凸面は焼成不良のためか、焼しがまわっておらず明灰色をとどめる。18は凸面に繩目痕が、凹面には布を縫じていた紐痕がみられる。19・20は軒平瓦である。19は中心飾りが三菱形を呈するものである。3 転する唐草である。20は三葉の中心飾りをもつ。21は平瓦で凹面に沈線が2 条ほど、向きを違えてある。色調は灰色である。

第4章　まとめ

今回の調査は引田城址の広大な城域のなかの僅かな範囲にとどまるものであるが、トレンチによるとはいえた初めての発掘を伴う調査であり、その成果と意義は大きいものといえる。ただ、調査完了から報告書の作成までの時間が限られており、遺物の整理も充分ではない。ここでは見通し的にふれることとしたい。

ついで曲輪における石垣・礎石建物・瓦の所在の明確化とともに遺構の複合的内容について看取できたことである。第Ⅰ調査区での石垣は技巧的に加工度の低い石材を使用し、高さも限定的で勾配もきつく二段の可能性もある。ただ、検出された礎石から建物の数や配置状況の精確な復元は困難であるが、曲輪に石垣を構築しその直上に礎石建物を配置していたことは想定される。また、壇状遺構については一概にいえないがその下部構造は、特殊な用途を目的としていたことも考えられる。搦手にあたる第Ⅱ調査区では虎口の形状、腰巻土塁をもった小曲輪、土堤などこれを防護する構造がどのようなものであったか検討を要する。



第18図 軒平瓦参考例

次に出土遺物のうち瓦については他城または他地域との関係について、その一端を示すものが含まれている。今回及びこれまでに出土したとされる引田城址の瓦のなかで、第17図19のような中心飾りが三菱形を呈するものや、第18図2のように中心飾りが宝珠文で3回転する唐草をもつものについては、高松城東の丸から同系統の出土が認められる。また、宝珠文を瓦当ではない部位に押捺した例が認められることである。図示はできなかったが、新たに1例を確認しており計3例となる。これらの宝珠は細部が明瞭で形式化していないものといえ、瓦工人の別を示す刻印とも考えられる。なお鯱瓦が含まれていることも特徴といえる。鱗の表現が省力化された感はあるが、建物の構造を考える上で重要といえる。

結果としてはこれまでにも想定されていた、織豊系城郭として引田城を再確認できたこととなる。年代的には細かい比定は困難だが、これまでと齟齬をきたすものではない。生駒氏が讃岐統治のため構築した地域拠点としての役割を果たしたことが窺われるものである。各曲輪についても石垣などは埋没しているだけ、基部だけではあるにしろ城域を巡っている可能性が高いといえる。また、その検出状況も破城の様相を留めた可能性も考慮される。築城から廃城までの使用された期間が限定的で、県内の城郭遺構の変遷を知るうえでの中心となるものである。今回及びこれまでの知見をあわせ、今後さらなる検討をはかることが重要である。

参考文献

『香川県中世城館詳細分布調査報告』2003 香川県教育委員会

第18図出典文献

- 北山健一郎『高松城跡－香川県歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』1999 香川県教育委員会ほか
① 第109図 532 ③ 第110図 534
『織豊期城郭の瓦』1994 織豊期城郭研究会
② 362頁

出土遺物観察表

掲載番号	調査区	出土位置	種別	胎土	色調	備考
1	I 区	D-1	軒丸瓦	1mm以下の砂粒僅	7.5YR4/1 暗灰	
2	I 区	D-4	軒丸瓦	5mm以下の砂粒僅	N6/ 灰	
3	I 区	D-1	丸瓦	3mm以下の砂粒僅	N5/ 灰	
4	I 区	A-2	丸瓦	2mm以下の砂粒僅	凸) 7.5Y6/1 灰色土	凸面に宝珠文押捺
5	I 区	B-2	丸瓦	5mm以下の砂粒少	7.5YR8/1 灰白	
6	I 区	A-1	軒平瓦	精良	凸) N8/ 灰:側面) N3/ 暗灰(燐黒)	
7	I 区	D-1	平瓦	2mm以下の砂粒中	5P3/1 暗青灰	
8	I 区	A-1	平瓦	精良	N3/ 暗灰(燐銀)	側面に宝珠文押捺
9	I 区	D-1	平瓦	精良	凹) 10BG5/1 青灰(やや白色が残る)	
10	I 区	A-2	平瓦	精良	N4/ 暗青灰	
11	I 区	D-3	備前焼	精良	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	擂鉢
12	I 区	C-1	鉄製品			
13	I 区	B-2	蟻瓦	1mmの砂粒僅	N3/ 暗灰色	
14	II 区	T r - 5	丸瓦	精良	N4/ 灰	
15	II 区	T r - 4	丸瓦	精良	5PB4/1 暗青灰(燐黒)	
16	II 区	T r - 4	丸瓦	2~4mmの砂粒少	5B6/1 青灰(燐)	
17	II 区	T r - 4	丸瓦	精良	凸) N3/ 暗灰(燐黒)	
18	II 区	T r - 4	丸瓦	2~7mmの砂粒多	凸) N4/ 灰色(燐)	
19	II 区	T r - 5	軒平瓦	5mm以下の砂粒多	N2/ 黒	
20	II 区	T r - 4	軒平瓦	精良	5B5/1 青灰(燐銀)	
21	II 区	T r - 4	平瓦	精良	凹) 10Y7/1 灰白	



1 第I調査区近景



2 A-1 トレンチ遺物出土状況



3 C-1 トレンチ礫石出土状況

図版2



1 B-1 トレンチ検出状況



2 B-2 トレンチ検出状況



3 B-3 トレンチ検出状況



1 塘状遗構近景



2 石垣検出状況①



3 石垣検出状況②

图版4



1 石垣検出状況③



2 壇状遺構石材（矢穴）



3 第Ⅱ調査区近景①



1 第II調査区近景②



2 第II調査区近景③



3 1 トレンチ検出状況

図版6



1 3 トレンチ検出状況



2 4 トレンチ検出状況①



3 4 トレンチ検出状況②



1-4 トレンチ検出状況③



3-4 トレンチ検出状況④

図版8



1 5トレンチ検出状況①



2 5トレンチ検出状況②



3 横台東西石垣

報告書抄録

ふりがな	ひがしかがわしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	東かがわ市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	平成16年度国庫補助事業報告書 引田城址							
編集著者	阿河銳二							
編集機関	大川広域行政組合埋蔵文化財係							
発行機関	東かがわ市教育委員会							
所在地	〒769-2692 香川県東かがわ市三本松1172番地 0879-26-1238							
発行年月日	西暦 2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡 番号	東經	調査期間	調査 面積	調査原因	
ひけたじょうし 引田城址	かがわけんひがし 香川県東かがわ市 ひけた しろやまこくゆうりん 引田城山国有林	372072	34° 13' 35"	134° 20' 17"	2004.10.1 ~ 2005.1.21	1,100m ²	市内遺跡 発掘調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
引田城址	城郭	近世初頭	石垣・礎石 壇状遺構 土堤	軒平瓦・軒丸瓦・平瓦 丸瓦・鰐瓦	石垣 磨石建物・瓦 葺きの城郭であるこ と確認する			

平成16年度国庫補助事業報告書

東かがわ市内遺跡発掘調査報告書

平成17年3月31日

編 集 大川広域行政組合

発 行 東かがわ市教育委員会

〒769-2692 香川県東かがわ市三本松1172番地

(TEL) 0879-26-1238

印 刷 株式会社 シロトリ